

中国日本商会

みつま

## 三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



### 三渚コラム 中国「津津有味」-9

最近中国に行くとき空港だろうが駅やバス乗り場だろうが、往来の壁だろうが、あらゆるところに孝道をはじめとする儒家道徳の発揚を呼びかける壁画を見かけます。為政者のスローガンは毛沢東のころから珍しくありませんが、儒家精神の発揚となると、年配者なら、つい、70年代の批林批孔運動を思い出して、その振幅の極端さのため息が出ます。

「儒家精神」の再評価が始まったのは2000年以降のこと。最初は「」付きだったのがいつの間にかそれも取れ、于丹という学者の書いた『論語心得』という本がベストセラーになりました。何しろ、人民日報に「修身齐家治国平天下」という言葉が為政者の心得として堂々と載っているのですから変われば変わるものです。

『社会公德』『職業道徳』『家庭美德』『個人品徳』というタイトルの本が、書店の共産党コーナーに並ぶようになり、四書五経にはピンインが施されて小学校で素読が行われ、最近では、腐敗撲滅に絡め、共産党員の家庭はしっかりした家風の確立が強く求められています。「儒蔵」と言う儒家の経典や注釈を詰めた大百科事典が国策で編集されたり、経営モラルに儒家精神を注入した「儒商」と言う言葉が現れたり、儒教によって2000年にわたり育まれた文化が半世紀ほどの不遇で消滅するわけがありません。

中国でなぜ子供の誘拐がなくならないか。それほどまでに需要があるのか、「その裏に儒教がある」と言ったらびっくりされるでしょう。勿論、儒教が人さらいを奨励するはずがありません。しかし、儒教最大の徳目は“孝”すなわち先祖の祀りを絶やさないこと。そこで、子供のいない家庭は子供を買ってくる。子供を買うこと自体は、結納金を払って嫁を貰うのと同じで、謝礼金と考えれば、犯罪とも言えませんが、問題は誰から買うか、ということです。あつせん者が善意ならまだしも、誘拐して売るのは犯罪ですが、それは買う側の知ったことではありません。

したがって、農村では、昨日まで子供がいなかった家庭に急に4歳くらいの子供ができて、誰も不思議に思わないし、家の祀りを絶やさないという儒家精神の発露ともなれば、非難されるいわれもないわけです。しかし、誘拐の蔓延のすさまじさに、さすがの政府も最近では取り締まりを厳しくし、誘拐グループの摘発が盛んに行われています。

バスなどで老人に席を譲るのは当たり前で、この点は日本よりはるかに上で

中国日本商会

みつま

# 三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



すが、時にはこうした儒教モラルが異文化コンフリクトになることもあります。ある中国人学生が日本の家庭にホームステイしたときに、「ご飯のお変わりはご自由に」と言われて自分でよそったら、日本人のお母さんに「自分で勝手によそってはいけません」と叱られ、泣いてしまいました。中国人の彼にしてみれば、目上の方に「自分のために飯をよそえ」などと言えたものではありません。でも、日本人のお母さんはそれに気づかなかったのです。日本では、自分でよそうのは「無遠慮」です。

その儒教には「己の欲せざるところを人に施すことなかれ」という言葉がありますが、ともに儒教精神が深く根付いている日本と中国には、互いにこの言葉を「拳拳服膺」して交流を深めることが、いま、最も求められている、と言って過言ではありませんまい。